

「マンハッタンの夜景」

水野 隆介



写真1 WTC 107階 Windows on the world (Wikipedia)



写真2 自由の女神像 (1988年筆者撮影)

「将来になりたい職業は？」と聞いて「構造設計者」と答える子供は稀であろう。私自身この職能を意識したのは大学からだ。最初のきっかけは大学2年生の時に見たマンハッタンの夜景である。「建築を学んでいるなら米国の摩天楼を見に行かないか？」と実家の父から電話があった。父が青年時代にカルフォルニアで農業研修生として過ごした旧友らとの東海岸旅行に同行させてもらった。NYではエンパイアステイトビル、クライスラービル他をまわり、夕刻にワールドトレードセンター（WTC）に上った。107階のレストランでマンハッタンの夜景を見ながら皆で会食した時の大人な雰囲気や感動は今でも鮮明に覚えている。

大学院を出た後、ゼネコン、欧州遊学を経て構造計画研究所に入らせていただき、六本木の超高層ビルの設計プロジェクトに配属された。チームに恵まれ、デザインに関わる部分の設計について比較的自由にアイデアを出すことができた。特にアトリウム周りが複雑であったため、方眼紙に多くの鉄骨詳細をスケッチした。

関係者が多い中での合意形成は容易ではない。構造パスなど視覚的に訴求力のある資料が物決めに役だった。昼夜共に忙しくも、充実した日々であった。その後、残業中に同僚と航空機テロによるWTC崩壊の中継映像を目の当たりにする。今まさに多くの命が奪われている現実には、私的にも象徴的であった場の崩壊に何とも言い難い喪失感を覚えた。

しばらく研究開発部門に移り設計から離れていたが、再び上海の超高層ビルの実設計プロジェクトに配属された。プロジェクトの前半はNYの構造設計事務所との膨大な英文の技術レターのやりとりから始まった。相手はWTCの構造設計者L.ロバートソン氏の事務所である。厳密な言語を媒体として物事を決めていく重要性を学んだ。俯瞰から詳細に向かう構造図の構成、表現はとても勉強になった。現地上海でのL.ロバートソン氏との設計会議や第三者審査会に末席ながら同席させてもらった。時に審査する側と議論が白熱する場面もあったが、ぶれない凛とした彼の立ち振る舞いに構造設計者のある

べき原形を見た。上海での短い出会いだっただが、マンハッタンの夜景に始まる私的な文脈と僅かながらつながったことに静かに感動した。

開業し今年で18年目となる。初年度は引き続き上海プロジェクトに、その後も国内外の大小ユニークなプロジェクトに恵まれ感謝している。構造設計者は社会の安全・安心を担うものとしてその責任は重い。建築家と比べて表に出ることも少ない。しかしこの仕事を通して多くの出会い、喜び、学び、感動がある。構造力学は世界の共通言語でもある。私自身この職能との出会いは幸運であった。二十歳の息子にマンハッタンの夜景を見せた父に感謝している。今年2月に巨匠L.ロバートソン氏のご逝去されたとのこと。心よりご冥福をお祈りします。

(次回は山内 哲理氏)

(みずの・りゅうすけ)
1967年生まれ 三重県出身 東京理科大学大学院修士課程修了(平野研究室) 2004年よりエム・イー・エム代表取締役一級建築士 構造設計一級建築士 JSCA建築構造士 趣味はギター

